

日本列島—文学文化風土の旅—埼玉・神奈川

*引用文中の地名には傍線(―)を施した。

埼玉の文学文化風土

武蔵野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

伊勢物語

一、日本列島

かつて和辻哲郎は、昭和十年九月岩波書店から出版された『風土 人間学的考察』で、日本列島の風土をモンズーン型として論じ、「われわれは自然と人間存在の構造として、いわば地理的・歴史的に規制されるところに心の風土的な意味がある」とし、「われわれは風土においてわれわれ自身を見、その自己了解において我々自身の自由なる形成に向かったのである」(岩波文庫)と記した。

またフランス人のオギュスタン・ベルクは『風土の日本』の第一章「気象」で、「日本列島を構成する約四〇〇〇の島々は南北約三〇〇〇キロメートルにわたって分布し、その範囲は、およそ北緯二四度から

竹内清己

四六度に及ぶ。緯度でいえば、ほぼキューバからケベックまでにあたることになり、したがって気候のタイプも熱帯から亜寒帯までがそろい」とし、日本はよくいわれる「海岸国の文化」である以上に、「沿岸国の文化」であって、「海岸線の総延長は約三万キロメートル」でソ連、オーストラリアに次ぐと、「潜在的な領域拡大能力」(筑摩書房宮原信訳)を持つと記した。

ここでは、日本列島の中の関東。江戸期までの関八州と呼ばれた武蔵、相模、上野、下野、上総、下総、安房、常陸の八州のうち武蔵野の、東北部に位置する埼玉の文学文化風土を論じる。なお、本稿は、東洋大学二〇二一年度全国講師派遣事業において、埼玉県新座市野火止および神奈川県茅ヶ崎市にて行われた講座に基づいている。

昔の埼玉は、武蔵国の埼玉(さきたま)郡であった。折口信夫の『万葉集辞典』で、「さきたま【埼玉】後の武蔵国埼玉郡よりは、もつと南部をも含んでゐて、当時は陸深く、今の東京都をも過ぎて入り込んでゐた海に面してゐたものと思はれる。」(折口信夫全集、中央公論社)とある現代の埼玉県。二〇二二年の秋の一日、何よりもさきに

《さき》を求めて行田へ向かった。「埼玉県名発祥之古社」とある行田の前玉神社に参詣した。この社は、『延喜式』にも載る古社で、記紀神話の女神「前玉比売神」を祀る。前玉比売の「前は幸」「玉は魂」で幸魂（さいわいのみたま）という意味である。

境内に万葉燈籠があり「小崎沼」と「埼玉の津」の碑が刻まれている。西行法師の奥州途上に詠みたる歌碑もある。

やわらぐる

ひかりをはなに

かざされて

名をあらわせる

さ記たまの宮

行田の街道の著名な古墳群を通り、さらに羽生まで、建福寺へ田山花袋の『田舎教師』の墓を目指した。

二、古典の中の《埼玉》

埼玉の古典文学として、古代日本最初の歌集「万葉集」巻十四の東歌に「右の九首は武蔵の国の歌」とある中から、埼玉に当たたる四首を引く、

①万葉集東歌

入間道の於保屋が原のいはあつら引かばぬるぬる我にな絶えそ
ね

我が背子をあどかも言はむ武蔵野のうけらが花の時なきものを
埼玉の津に居る舟の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね
夏麻引く宇奈比をさして飛ぶ鳥の至るらむとぞよ我が下延へし
(新潮日本古典集成)

これらには古代埼玉の風土文化がうかがえる。

②伊勢物語

王朝期からは歌物語を代表する「伊勢物語」の在原業平の東下りの中に、第七段、

・むかし、をとこありけり。京にありわびて、あづまにいきけるに、
伊勢、尾張のあはひ海づらを行くに、

とあり、九段に、

・なほ行きくして武蔵の国と下つ総の国との中に、いと大きな河あり、それをすみだ河といふ。

昔の東路の道は東海から上総に渡り下総から武蔵に入った。隅田川から武蔵の国に入って十三段、

・人のむすめをぬすみて、武蔵野へ率て行くほどに、

武蔵野はけふはな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり
この歌の歌碑が新座の野火止にある。男はさらに東北に向かったと思われる。十四段に、

・陸奥の国にすするに行きにけり、(岩波文庫)

とある。

中世から能の一曲だけあげておく、

③能「敦盛」

・これは武蔵の国の住人。熊谷の次郎直実出家し。蓮生と申す法師にて候。さても敦盛を手に掛け申しし事。余りに御傷はしく候ほどに。かやうの姿となりて候。(観世流太成版)

近世からは芭蕉の「奥の細道」を対応させる。これも上野から、

④松尾芭蕉「奥の細道」

・千住といふ所にて船を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

・奥羽長途の行脚ただかりそめに思ひ立ちて、……その日やうやう草加といふ宿にたどり着きけり。瘦骨の肩にかかれる物、まづ苦しむ。(岩波文庫)

同行の曾良の「曾良旅日記」より、

・廿七日夜、カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余。廿八日、ママダニ泊ル。カスカベヨリ九里。前夜ヨリ雨降ル。此の日栗橋ノ関所通る。

(『芭蕉おくのほそ道』岩波文庫)

さらに日光から奥羽へ。

三、近代文学の中の《埼玉》

近代に入って短歌、俳句の改革者正岡子規に芭蕉の「奥の細道」に

做った「はて知らずの記」という紀行があること知った。その中に埼玉は、

玉は、

①正岡子規「はて知らずの記」

みちのくへ涼みに行くや下駄はいて

など戯る。汽車根岸を過ぐれば左右の窓に見せたる平田渺々として眼遙かに心行くさまなり。

武蔵野や青田の風の八百里

宙を踏む人や青田の水車(『子規紀行文集』岩波文庫)

川越は徳川家光誕生の江戸情緒を今に残す町、喜多院・東照宮がある。明治二十年代「紅露時代」と称された露伴の出世作『五重塔』の主人公が川越の源太とのつそり十兵衛である。

②幸田露伴『五重塔』

・上野日暮里天王寺の五重塔。十兵衛の相手の源太は河越の名工。

紅都の住人兵衛之を造る。川越源太郎之を成す。(『日本近代文学大系 幸田露伴集』)

川越がことさら印象される。言文一致体の最初の成果は『武蔵野』で二葉亭四迷の『浮雲』と並び称せられる。

③山田美妙『武蔵野』

・ああ今の東京、むかしの武蔵野。今は錐も立てられぬ程の賑はしき、昔は関も立てられぬほどの広さ。今仲の町で遊客に睨付けられる鳥も昔は海辺四五丁の漁師町でわづかに活計をたてて居た。

・其頃はまだ純粹の武蔵野で、奥州街道はわずかに隅田川の辺に沿ってあつたので、中々通常の者で只今の九段あたりの内地へ足を踏込んだ人は無かつたが、その些し前の戦争の時には……思出しても二方（新田義宗と義興）の御手並、さぞな高氏つらも身戦みぶるをしたらうぞ。（岩波文庫旧版）

とある。今昔の地誌が風土につながる。

同じく題名も『武蔵野』の独歩の作。これは日本風景論の傑作。正に入間郡から書き出される。

④ 国木田独歩『武蔵野』

・「武蔵野の佛は今わづか纔いとほに入間郡に残れり」と自分は文政年間にできた地図で見た事がある。そしてその地図に入間郡「小手指原久米川は古戦場なり太平記元弘三年五月十一日源平小手指原にて戦ふ事一日か内に三十余日暮れば平家三里退て久米川に陣を取る明れば源氏久米川の陣へ押寄ると載せたるはこの辺なるべし」と書込んであるのを読んだ事がある。（中略）自分は武蔵野の美と言った、美といわんより寧ろ詩趣といたい、その方が適切と思われる。

・山家の時雨は我が国でも和歌の題にまでなつて居るが、広い、広い、野末から野末へと越え、杜を越え、田を横切り、又た林を越えてしのびやかに通り過ぐ時雨の音の如何にも幽かで、又た鷹揚な趣きがあつて、優しく懐しいのは、実に武蔵野の時雨の特色である。自分が嘗て北海道の森林で時雨に逢た事がある。これは又た人

跡絶無の大森林であるからその趣は更に深いが、その代わり、武蔵野の時雨の更に人なつかしく、私語ささやくが如き趣きはない。（新潮文庫）

北海道については「空知川の岸边」「牛肉と馬鈴薯」がある。

⑤ 太田玉茗『花ふゞき』

太田玉茗は行田の生まれ、羽生の建福寺に養子となり住職となる。

田山花袋、柳田国男、国木田独歩らと『抒情詩』を刊行、「花ふゞき」掲載。

「帰らぬ父」

熊ざ、しげる山かげに、／小唄うたへる声ぞする／歌へること
は優しくも／風のまに／聞えつ（『日本の詩歌』中央公論社）

故郷、振り分け髪かみの少女の物語詩。玉茗の義兄田山花袋の長篇『田舎教師』こそ埼玉近代文学の開祖ともいふべき名作。その書き出し、

⑥ 田山花袋『田舎教師』

・四里の路は長かった。その間に青縞あざの市のたつ羽生の町があつた。田圃にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。赤い蹴出しを出した田舎の姐あねさんがおりおり通つた。（中略）五年間の中学校生活、行田から熊谷まで三里の路を朝早く小倉服くわらぼん着て通つたことももう過去になつた。

・ところがそれから二年ほどして、その墓参りをした娘が羽生の小学校の女教員をしているという話を聞いた。

「あの娘は林さんが弥勒で教えた生徒」だとサ」とかみさんはどこかで聞いてきて和尚さんに話した。……

・秋の末になると、いつも赤城おろしが吹きわたって、寺の裏の森は潮のように鳴った。その森のそばを足利まで連結した東武鉄道の汽車が朝に夕べにすさまじい響を立てて通った。(旺文社文庫)

⑦宮沢賢治

岩手の宮沢賢治が青春の日に秩父を歩いた。これは地質学者にして『春と修羅』の詩人の生涯にとって貴重な体験だった。

さわやかに

半月かかる 薄明の

秩父の峡のかへりみちかな

ほしの夜を

いなびかりする三みねの

山にひとりしなくか こほろぎ (宮沢賢治全集、筑摩書房)

また山形の茂吉も、

⑧斎藤茂吉

『ともしび』『三峯山上』

いつしかもあかあかとして月てれる檜原の山に夜の鳥ぞ啼く

山のうへに光あまねく月照りて真木にきほひ啼く鳥

『白桃』『秩父吟行』

なまよみの甲斐につづきてたなはる秩父の山に冬の日入りぬ
秩父嶺の山峡とほく入り来つつあかとき霜のいたきをも愛ず

(『斎藤茂吉選集』岩波書店)

埼玉出身の近代文学者も多い。例えば巖谷大四『現代文壇人国記』(集英社)に沢野久雄・石井桃子・三上於菟吉・豊田三郎・岡本潤らが並ぶ。

文芸評論・研究の分野の方との忘れられない交流から二人のみあげる。

⑨大久保典夫 春日部高校から早稲田国文、「わが青春紀行―古利根の細流―」から、

・私の生家は、旧日光街道沿いの幸手町仲町の際物問屋で、正三五の祝い物を造り、周辺の町で開かれる市へ出向いて商いをしていた。

北葛飾や南埼玉だけでなく、古河・関宿・水海道・岩井、それに栃木の方まで馬力で出掛けていったようだ。

⑩松本鶴雄 児玉郡生まれ、本庄高校から早稲田露文、井伏鱒二の研究の他、『さきたまの文人たち』もある。

参考文献

『埼玉の文学散歩』(さいたま文学館二〇一七・一〇)

『宮沢賢治 秩父路を行く―二十歳の旅・地質旅行のルートをたどる―』

(さいたま文学館二〇一七・一〇)

一年後、会場の学芸員から、新座教育委員会から「新座市の自然と用水路の小路を当館までご案内でき、云々」と添え書きとともに、資料を頂く。「野火止用水・平林寺の文化的景観保存計画概要版」「文化財マップ」「緑と清流 野火止用水の復活」「新座歴史探訪」など。

千葉と埼玉を結んで東京の府中まで武蔵野線が結ぶ。西船橋発―松戸―三郷―越谷―川口―浦和―所沢―小平―国分寺―府中着。浦和―所沢間の北朝霞は、私の大学勤務で通った地。隣が新座、この会場。

さらに本論を執筆中、賢治の短歌絶筆二首に出逢った。

病いんまのゆゑにもくちんいのちなりみのりに棄てばうれしからまし

方十里神貫ひんかぬのみかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる (宮沢賢治全集、筑摩書房)

「みのり」「稲」「熟れて」―命のいまわに農を思い祝す賢治の二十歳の地質学者の旅が秩父路にあったことも、埼玉の文学文化風土のページであった。

―二〇二二年一月一九日 於・埼玉県新座市 野火止公民館―

日本列島―文学文化風土の旅―《神奈川》

さねさし相模さがむの小野に燃ゆる火の火中ほに立ちて問ひし君はも

古事記

一、古典の中の《神奈川》

この地域は列島の神奈川という土地。一千年以上前から歌枕に、「さねさし相模」と歌われたこの地の文学風土には大変豊かなものがある。相模は京の都から武蔵野に入る最も手前、これを日本古典から引くと、日本最初の「古事記」(古事記は、歴史書だが他の旧記、日本書紀より物語性が豊かな書)のヤマトタケルの東征の物語に歌草を残した。

①古事記

・かれここに相武さがむの国に到ります時に、その国の造、詐りて白さく、
……

・そこより入り幸いでまして、走水はりのみの海を渡ります時に、その渡の神、浪をたてて、

とその後弟橘比売おとちりほなが祈りのため入水する。さねさし相模さがむの小野に燃ゆる火の火中ほに立ちて、問ひし君はも と、

・かれ七日の後に、その後の御櫛海辺に依りき。(岩波文庫)

この流れ着いた海辺を上総の木更津、君津とする説がある。三浦半島の横須賀から走水の神を見舞ったわけである。

②万葉集

また、万葉集の東歌から、

足柄あひがらのをてもこのもにさすわなのかなるまじづみ子ろ我れ紐解ひもとく
鎌倉かまくらの見越みこしの崎の岩崩いわぶくえの君が悔くゆべき心は持たじ
相模道さがむちの余綾よろじの浜の真砂まごなす子らは愛かなしく思おもはるるかも
を引ひき、旋頭歌せんとうに

薪伐たぎさる鎌倉山かまくらの木垂くだる木を松と汝が言はば恋こひつつやあらむ（新
潮日本古典集成）

があり、足柄、鎌倉、相模の地名が歌謡に親しませる。

③金槐和歌集

鎌倉といえは三代將軍源実朝が文学の人である。私は太宰治の長篇

『右大将実朝』を熟読した青年期を持つ。実朝の

箱根路はこねをわが越えくれば伊豆いずの海や沖の小島に波の寄るみゆ

宮柱みやしらふとしきたてて万代よろづよに今ぞさかえむ鎌倉かまくらの里

おほ海の磯いそもとどろによする波なみわられてくだけでさけて散るかも

この三首は地域歌謡として親しまれるが、実朝の次の人情歌は
絶唱ぜつしょうでなろうか。

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる

物いはぬ四方よもの獸けだものすらだにもあはれなるかな親の子を思ふ

時により過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ（岩波文
庫）

④『とはすがたり』

『吾妻鏡』の膨大な歴史書は文学としても読めるし、太宰治が文学
書として読んだ。『東関紀行』や『十六夜日記』も広く読まれた。

後深草院二条の『とはすがたり』の文芸性は豊かである。西行に倣
う東国への旅は、江の島―鎌倉に到り、

・かくて荏柄じんがら・二階堂にかいどう・大御堂だいごどうなどといふ所ども拝みつつ、大蔵おほぞくらの谷
といふ所に小町殿とて將軍に候ふは、……（角川文庫）

注に「雪の下。頼朝の館があつた。最初幕府も、ここにあつた」と
ある。

⑤謡曲

中世文学の中でも能・謡曲に相模の典故は多い。観世流太成版が
ら引く。

「七騎落しちきおち」

・これは兵衛へいゑの佐頼朝さよりともとは我が事なり。さても昨日石橋山いしはしやまの合戦かせんに味
方うち負け。余りに無勢むせうに候程むらに。一まづ安房上総あづまのへの方へ開かばや
と存じ候。

「千手せんじゆ」

・これは鎌倉殿かまくらどのの御内みうちに。狩野カノの介宗茂すけむねもにて候。さても相国さうこくの御子
重衡じゆうかうの卿は。この度「の谷かのやの合戦かせん」に生捕いけだられ給ひ候を。

「盛久もりひさ」

・只今関東せきとうに下りなば。これが限りなるべし。清水しみずの方へ輿こしを立てて

……越えても関に清見潟……雪の富士の嶺箱根山。なほ明け行くや
星月夜はや鎌倉に。着きにけり。

〔鉢木〕

・我この程は信濃の国に候ひしが。余りに雪深くなり候程に。まづこの度は鎌倉に上り。春になり修行に出でばやと思ひ候……佐野のわたりに。着きにけり

〔景清〕

・これは鎌倉亀が江に。人丸と申す女にて候。さても父悪七兵衛景清は。平家の見方たるにより。源氏に憎まれ。日向の国宮崎とかやに流されて……相模国を立ち出でて。誰に行方を遠江げに遠き江に旅舟の。

〔二人静〕

・そののみならず憂かりしは。頼朝に召し出され。静は舞の上手なりと。

〔小袖曾我〕

・これは曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候間。我等も罷り出て候。

〔江野島〕

・さても相模の国江野と云ふ浦に。去んぬる卯月十日余りに。不思議の奇瑞様々あつて。海上に一つの島涌出す。乃ち江野に准へてこれを江野島と号す。(観世流太成版)

列挙に留めるが、頼朝から江ノ島まで、人と地の文化風土記として今日に伝承され続けている。

二、近代文学の中の《神奈川》

神奈川の近代文学といえ、先ず海港横浜と古都鎌倉の二大文学圏を挙げるべきだろう。

「日本近代文学の風土」と題して、武蔵国の《東京》にたいする機内の《京阪》、東京と横浜、大阪と神戸という対応を、「《阪神》の大阪の文学がそうであったように、東京の文学は、横浜と一緒に《東横》として扱うのがのぞましいかもしれない」(竹内清己編『文学空間 風土と文化』桜楓社)と書いた。日本文化の西からの東漸、ペリーの浦和来航からの開国の始動、横浜に開港記念会館とか岡倉天心生誕の碑があるのは象徴的。鎌倉は言うまでもなく江戸幕府が成立するまで東国唯一の政権都だった。

○海港の文学―横浜

大仏次郎の『幻灯』は、明治初頭の横浜の外人居留地。横浜税関長をモデルにしている。有島武郎、生馬、里見弴はその子息。

① 大仏次郎『霧笛』

・波止場近くなるにつれて、町はさびしうなっていた。闇は厚はったくて、潮曇りした空の星の色を白く目立たしている。人通りなん

て、てんでない通りだった。やがて、石炭置場について廻り急に風のあたりが強くなったかと思うと、二人は海岸に出ていた。

二人は谷戸坂を上り始めた。遠く舟の霧笛の音が崖の暗い、空の高い深夜の静寂の中に聞こえた。尾を港の空に長くひいて、淋しい音であった。(『日本文学全集 大仏次郎』集英社)

②横浜歌謡

森鷗外の「横浜市歌」

されば港の数多かれど／この横浜にまさるあらめや／むかし思えばとま屋の煙／ちらり ほらりと立てしところ

東辰三「港が見える丘」の、あなたと二人で来た丘は／港が見える丘、美空ひばりの「港町十三番地」「波止場だよお父つあん」「哀愁波止場」、いしだあゆみ「ブルーライト・ヨコハマ」、青江三奈「伊勢佐木町ブルース」、五木ひろし「よこはま たそがれ」枚挙にいとまない。それに港の公園には野口雨情の「青い目の人形」「赤い靴」の碑がある。

③有島武郎『或る女』

・こうして葉子にとつては永い時間が過ぎ去ったと思われる頃、突然頭の中を引っかき回すような激しいおとを立てて汽車は六郷川の鉄橋を渡り始めた。

・列車が川崎駅を発すると、葉子は手欄によりかかりながら木部の事を色々思ひめぐらした。……何時見ても新開地じみて見える……神

奈川を過ぎて、汽車が横浜の停車場に近づいた頃には、八時を過ぎた太陽の光が、紅葉坂の桜並木を黄色く見せる程に暑く照らしてゐた。その夕方倉地が埃にまぶれて紅葉坂をすたすたと登って帰って来るまでは旅館の鬨をまたがずに桜並木の下などを徘徊して俟っていた。(新潮文庫)

武郎の児童文学の『一房の葡萄』も横浜山手のミッションスクール。

④葉山嘉樹『海に生きる人々』

・室蘭港が奥深く入り込んだ、その太平洋への湾口に、大黒島が詮をしている。

汽船万寿丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横浜へと進んだ。

現在、室蘭港にこの冒頭を刻した文学碑がある。

『淫売婦』

・私は未だ極道な青年だった。船員が極まり伐つて着ている、続つぎの葉服が、矢つ張り私の唯一の衣類であつた。

・そのムン／＼する蒸し暑い、ブラタナスの散歩道を、私は歩いた。何しろ横浜のメリケン波止場の事だから、些か格好の異つた人間達が、たくさん、気取つてブラついていた。(『日本現代文学全集 葉山嘉樹集』講談社)

ここは今ではしゃれた元町商店街の交差点あたりだろう。

⑤坂口安吾『海の霧』

・波の上に夜が落ちる。海に沿うた甃いじの道に霞の深い街灯の薄明り、夜の暗色と一緒に、噎あたりっぽい磯の匂いが、急にモヤモヤした液体のようになり、灯のある周囲あたりに浮きながら流れはじめると、ときどき外国の船員が、影と言葉を置き去りにして、闇の中へ沈没しながら紛れしてしまう。(『坂口安吾全集』冬樹社)

私は室蘭のこのような葉山や安吾の描写の横浜に惹かれる。プロレタリア文学と無頼派のミアレスとして。

⑥八木義徳『私のソーニャ』

室蘭出身の芥川賞作家の八木は、復員して妻子が東京空襲で焼死したのを知り、横浜市鶴見の兄夫婦の家に転がり込んだ。私も故郷室蘭の文学風土に育ち、東京、横浜の文学に親しんだ。

・そこ——海、いや港は私の住む町の駅から省線電車で四つ目の駅にあった。それは終点であった。

・やがてこの無言劇にも飽きると、私は海港の風景を任意に一区画ずつ区切り、その大きさにしたがって適当な号数の額ぶちをはめる。

(『講談社文芸文庫』)

⑦鈴木亨『柳絮』

堀辰雄らの四季派の最年少の詩人から一人、最後の詩集の一篇から。

「帰郷」

ふるさとに帰っても／身寄りに会えるわけじゃない／ふるさとに残っているのは／丘陵の市営霊園に／背ぐくまって建つ／わが家の朽ちた墓碑だけだ (花神社)

⑧谷崎潤一郎『痴人の愛』

谷崎の『痴人の愛』の譲治が見いだした浅草の千束町に見いだしたナオミもハマへ、

・私たちは、あれからヨコハマに引き移って、かねてなおみの見付けた山手の洋館をあるきました。まもなく本牧の、前に瑞西人の家族が住んでいた家を、…… (角川文庫)

大正活映画 脚本部顧問とある。「アマチュア倶楽部」で妻の妹葉山三千子売り出す。

舞台は横浜から鎌倉の海水浴に移る。

○古都の文学—鎌倉

鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな 晶子
『恋ころも』

鎌倉は古都でありつつ現代のロマンのありかだった。鎌倉文学を北鎌倉の円覚寺から入る。

⑨島崎藤村『春』

・岸本が泊つて居るところは円覚寺境内の古い禅寺で、苔の生えた石階を登りつめたところに門を構へたやうな位置にある。(『藤村全

集』筑摩書房)

⑩夏目漱石『門』

・帰源院 扁額「万法帰源」

『こころ』

・宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。(新潮文庫)

⑪小林秀雄『鎌倉』

鎌倉が外来文学者が住居とした文化都市だった。

・鎌倉は禅寺が多いから、みんな禅坊主に引導をわたされた。神西清

のは、松ヶ丘の東慶寺であつた。縁切寺とか、駆入寺、駆入寺で通

つた有名な寺である。(『小林秀雄全集』新潮社)

小林も高見順も東慶寺に墓がある

⑫吉井勇『夏のおもひで』

・夏はきぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ

・鎌倉のうら山づたひ君とゆく山百合の花月草の花

・なでしこや大仏道の道ばたに君が捨てたる貝がらの咲く(『酒ほが

ひ』日本の詩歌)

⑬川端康成『再会』

戦後、鎌倉に「鎌倉文庫」を創設した川端らは日本の戦後文学の礎
だった。

・祐三は鎌倉駅において若宮大路の高い松の列を見上げると、その梢
の方に正しく流れる時の階調を感じた。震災地の東京については、こ

んな自然も見落としがちに過ごした。

・鶴岡八幡宮に「文墨祭」があるという鎌倉の友人の葉書で祐三は出
て来たのだった。

敗戦文学として鎌倉―若宮大路―実朝の文学、振り袖の令嬢の一軍
と進駐軍の取り合わせが鮮烈。

『千羽鶴』

・鎌倉円覚寺の境内にはいつてからも、菊治は茶会へ行くかう行くま
いかと迷っていた。

『山の音』

・風はない。月は満月に近く明るい、しめつぽい夜風で、小山の上
を描く木々の輪郭はぼやけている。しかし風に動いてはいない。

信吾のいる廊下の下のしだの葉も動いていない。

鎌倉のいわゆる谷の奥で、波が聞こえる夜もあるから、信吾は海
の音かと疑ったが、やはり山の音だった。(新潮文庫)

芥川龍之介が横須賀の海軍機関学校に赴任したが、その後の鎌
倉文学に波及した。

⑭堀辰雄『風景』

・波止場の付近はいつものやうに、ぶんぶん酒臭い水夫や、忙しそう
に陸揚げしている人夫どもで一ぱいだった。あの税関のなかで……

芥川の告別式の「死があたかも一つの季節を開いたかのようにだっ
た」に始まる、

『聖家族』

・それは何かの薬品の名を思い出させるような名前の、小さな海辺の町であった。(角川文庫)

とあるのは鎌倉を超えた藤沢だろうか。鎌倉、堀が結婚直前咯血して入院した額田病院、のち逗子から鎌倉小町に住んだこともある。独歩と鎌倉も『運命論者』などなじみ深い。

⑮ 国木田独歩「鎌倉夫人」

・秋の中過、冬近くなると何れの海浜を問わず、大方は淋れて来る、鎌倉も其通りで、ある日自分は何時のやうに滑川の辺まで散歩して、さて砂山に登ると、(『国木田独歩全集』学習研究社)

鎌倉妙本寺懷古

夕日いざよふ妙本寺／法威のあとを弔へば／芙蓉の花の影さびて／我が世の末を嘆くかな (『独歩遺稿』)

横浜同様に歌謡も多い。そのうち二曲。

「桜貝の歌」

・麗しき 桜貝一つ／去り行ける 君にささげん、

「七里ヶ浜の哀歌」

・真白き富士の嶺 緑の江の島／仰ぎ見るも 今は涙

腰越の万福寺は義経の兄頼朝への腰越状が遺る、そのほとりの小動岬の磯は太宰治の心中未遂の場となった。兄から受けた津島修治の分家除籍後の、腰越状のゆかりだった。芥川賞の最終候補作『道化の

華』の舞台である。

多摩川畔

ひるがえって武蔵野から相模への入り口が多摩川、川崎。

万葉の東歌に、

多摩川にさらす手作りさらさらになにぞこの児のここと愛しき出身者の岡本かの子『生々流転』、佐藤惣之助『華やかな散歩』のわたしは草と花で／一つの川をかけた／わたしは星と花火で／海と港をかけた

⑯ 国木田独歩「忘れ得ぬ人々」

・多摩川の二子の渡しをわたって少しばかり行くと溝口という宿場がある。その中程に亀屋という旅人宿がある。(新潮文庫)

三浦半島

東京湾と相模湾を分かち三浦半島が房総半島と向かい合う。

⑰ 国木田独歩「たき火」

・北風を背になし、枯草白き砂山の岨に腰掛け、足をなげだして、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつ、沖より帰る父の舟遅しと俟つ逗子辺の童の心、その淋しさ、うら悲しさ如何あるべき。

(『国木田独歩全集』学習研究社)

⑱ 北原白秋「城ヶ島の雨」

雨はふるふる城ヶ島の磯に、／利休鼠の雨がふる。／雨は真珠

か、夜明けの錐か／それともわたしの忍び泣き。(日本の詩

歌 北原白秋)

⑱ 徳富蘆花『自然と人生』

「相模灘の落日」

・三浦半島南端城ヶ島と真鶴岬を結ぶ海域…… 秋冬風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山々に落つる日を望むに、世に斯かる平和のまた多かる可しとも思われず。(『岩波文庫』)

あとは風土の地を列挙するにとどめる。江ノ島―藤沢―鶴沼―茅ヶ崎―大磯・小磯―真鶴半島と相模湾は見所も文学も豊富。真鶴半島は、

⑳ 志賀直哉「真鶴」

・沖へ沖へ低く延びている三浦半島が遠く薄暮の中に光った水平線から浮んで見られた。そして影になっていく近くには却って暗く、岸から五六間綱を延ばした一艘の漁船が穏かなうねりに揺られながら舳に赤々と火を焚いていた。(新潮文庫)

静岡の伊豆半島は向こうにして、このあたりは大リゾート小田原・湯河原・箱根が並ぶ。箱根から、

㉑ 斎藤茂吉『ともしび』箱根漫吟

しづかなる峠をのぼり来しときに月のひかりは八谷をてらす
こほろぎは消ぬがに鳴きてゐたりけり箱根のやまに月照れると
き (『斎藤茂吉選集』岩波書店)

のみを挙げておく。

神奈川は、県立神奈川近代文学館、鎌倉文学館など文学館も目白押し。

おわりに、本論・講演の会場でもあった茅ヶ崎にちなんで、

茅ヶ崎の文学 南湖院と独歩―

㉒ 国木田独歩『病床録』

・茅ヶ崎の砂は鎌倉に比して色黒く粒大なり。風物荒寥たる所以なり。

茅ヶ崎の空気は荒し、肺を病む人には適せざる如し。又湿と乾との差も甚し。

・今一度東京の土を踏みたし、担架に乗っても好いから東京の土を踏みたし。骨になつて東京に帰るはイヤだ。(五月二十八日)

・一昨日は御待申候然るに昨日又もや咯血致候都合三度目に候されど別に気を落とさず 御光来を偏に待候

六月二十二日夕

吉江孤雁様

独歩

これが絶筆となった。南湖院第三病棟が終焉の場所だった。

現在、茅ヶ崎に旧南湖院第一病舎が残っている。南湖院記念太陽の郷庭園。「関東の富士見百景」の絶景がある。

②3 佐藤春夫『田園の憂鬱』

神奈川の湘南の地にしてここが終の棲家となった文学者も多い。文学の一大集積地である。山の手も同様である。また神奈川は武蔵野から富士山連山へつらなる山間の地でもあった。その事例を一つだけあげるに止める。

・広い武蔵野が既にその南端になつて尽きるところ、それが漸くに山国の地勢に入ろうとする変化―言はば山国からの微かな余情を湛へたエピロオグであり、やがて大きな野原へ波打つプロロオグでもあるこれ等の小さな岡は、目のとどくかぎり、此処にも其処にも起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じて居るあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下^{へりくだ}つた草屋根があった。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、……（岩波文庫）

Tとは東京、Yとは横浜、Hは八王子あたりだろうか。このセンテンスの長大なスコープがとぎれることなく展望されている。

この海と山の間長い相模台地が続く、相模野から相模原が広がっている。

上京以来、神奈川の文学者や研究者にも多く接した。丹沢山系の麓の秦野には三木露風の研究者にして歌人の山田吉郎がおり、相模野の相模原には詩人にして研究者仁科理・馬渡憲三郎も住まっている。

参考文献

- 『都市の叫び、水のささやき 川崎と文学』（県立神奈川近代文学館一九九一・七）
 『鎌倉文学の理想郷』（県立神奈川近代文学館一九九五・一〇）
 『箱根・県央 緑と風と文学と』（県立神奈川近代文学館一九九六・四）

結び

まことに大地は海に浮かぶ島であり、島の先には半島があり、半島があれば湾や浦があり、岬がある。山と海を結ぶ水の流れは川であり、谷や原や池や湖がある。文学は言葉を媒介にして人間その他諸々のものとともに、自然を取り込む。

しかし逆に自然が文学を取り込む、ともみられないか。人間と人間の織りなす社会や時代ともに文学のフィールドの探求が行われる。地域文学の展開であり、場所と地形、風土が関係する。

列島の文学文化風土として埼玉・神奈川に紙上の旅を試みた。武蔵野の北東の埼玉は、東山道の上野^{かみつけ}の群馬、下野^{しもつけ}の栃木に境界を接する。田山花袋の『田舎教師』は、まさにその境界の羽生・行田が舞台、己の東京志向に苦しめられる。また、北村透谷の「三日幻境」の八王子と横浜、東京の山稜地帯の生活誌『田園の憂鬱』は、山梨や静岡をも境界とする。地域の人間は文化風土を醸成し、文学作品を生み出す。

かつて私は『センスの場所^{トポス}』（七月堂）と題して近代詩を散歩した。

その中で「建物の章」を構え、石川啄木の「家」という詩を、

場所は、鉄道に遠からぬ、

心おきな故郷の村のはづれに選びてむ。

西洋風の木造のさつぱりとしたひと構へ、

高からずとも、さてはまた何の飾りもなくとても、

広き階段とバルコンと明るき書齋……

げにさなり、すわり心地のよき椅子も。

……

と引き、しかし結核の啄木は、故郷の洪民に帰ることなく東京で借家さえ追われ移転先で没した、と記した。

西田幾多郎は場所論を展開し「場所」(大二五)で、「我々が物事を考える時、之を映す如き場所というものがなければならぬ。先づ意識の野といふものをそれと考へることが出来る。」と記した。また、エドワード・レルフは『場所の現象学―没場所性を越えて』(筑摩書房、高野岳彦他訳)で、場所の概念として次の六つをあげている。

- ・「他の事物や場所に関係する位置」
- ・「自然および文化的諸要素の統合体」
- ・「相互作用と移動のシステム。それらは循環構造の一部を成す」
- ・「より大きな地域の一部であり、かつ地域分化システムの中心」
- ・「たえず形成され成長している。独自の歴史要素をもつ」
- ・「意味を持つ。それらは人間の信念によって特徴づけられる」

また「人間的存在の根源的中心としての住まいの場所」について、

そこに存する「愛着と離反」のセンスに着目し、「場所の重荷」の所在を論じている。こうしたことも、大都市東京を挟む埼玉や神奈川には考察出来ると思われる。その際、私が挙げた諸作品の引用中の傍線した場所・地名を手懸かりにすることができよう。

地域や土地の地勢、ランドフォームやスケープ、トポグラフィとしてとらえることもできる。

—二〇二一年二月一六日 於・茅ヶ崎市市役所会議室(東洋大学からのリモート)

キーワード

日本列島・埼玉・神奈川・古典・近代